

## 増補改訂版あとがき

『石塔調べのコツとツボ』を上梓したのは二〇一七年一月。初版はありがたいことに反響が大きく同年三月には第2刷に入った。専門書で第2刷に入るだけでも驚くべきことだが、それも二〇二三年には残部僅少となつてしまった。石塔の調査研究に興味を持つ人が増えてくれたことはすごく喜ばしいことである。

つぎは第3刷に入るのかと思つていたところ、高志書院の濱久年氏から、石造物研究も進展してきて新たな調査法も登場しているのではないかという相談を受け、若干の項目を追加して増補改訂版とすることにした。しかし、あらたな調査法や新技術について筆者が加筆できることは限られているため、新進気鋭の研究者にそれぞれの専門領域について簡潔にまとめてもらうこととした。

昨今の考古学界ではデジタル技術の応用に目覚ましいものがあり、3D計測ができるソフトで簡易な三次元計測図を作成した方も多いと思う。しかし、本書の基本は石塔の観察であり、その結果が図になるという考え方であるため、自らも手描きの実測図を作成し、それを基礎に研究を積み上げ、さらにそれを踏まえてデジタル技術を応用する方法を確立された本間岳人氏に分担をお願いした。3D計測図に自身の観察を加えて図化を試みることは、より精度の高い実測図を作成することにつながると考えている。

つぎに近年研究が各所で盛んになりつつある、採石加工技術の調査法を紹介する必要があると考え、矢穴痕跡の調査法についてその研究を牽引する佐藤亜聖氏に分担をお願いした。佐藤氏の話を知っていると何十年も前から見ていたはずの石塔に矢穴痕跡が見えてくるようになった。その観察方法や注意点が広く周知されると、各所で新たな資料が確認されるのではないかと期待がある。

もう一つ、実は古くて新しい調査法として、石造物(墓石)の悉皆調査がある。こうした調査は一九二九年に坪井良平氏が個人の力で木津惣墓を調査したことを嚆矢とするが、個人ではなくチームで進めるのが基本であり、特別な研究費も持たない環境下で近在の墓地を地道に調査する方法がこの先重要になってくることは明らかである。そこで悉皆調査を実践している、海邊博史氏と森山由香里氏に分担をお願いした。最も身近な石造物ながら、その量に圧倒されて手も足も出せないと思っていたものが、少しずつ地道に継続することで大きな成果となってくることを理解していただけたらと思う。そこには墓仕舞いや墓地整理に伴う中近世石造物の消滅という危機が迫っており、早急に対応しなければならぬ環境になりつつあるという現実的な問題も、悉皆的な調査法を取り上げた理由の一つである。

石造物の研究は日進月歩で進化しているが、これで新しい視点の調査法を加えることができた。今後も各地で精度の高い調査がおこなわれ、成果が報告されることで広く情報が共有されることに期待したい。地道だがそのことが石造物の研究、さらには中近世の考古学や歴史学等の研究に寄与できる近道と信じている。

二〇二四年十一月吉日

狭川真一